わんりぃ

223号
2017/5/1

日中文化交流市民サークル‘わんりぃ’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
http://wanli-san.com/
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

「可愛い孫」 撮影した時がたまたま日曜日であったので、ちょうどおばぁちゃんの家に孫が遊びに来ていました。孫も可愛いくて撮影したいし、おばぁちゃんも魅力的で撮影したいし、いっそのこと一緒にと頼んで撮影させてもらいました。どこの国でも孫への思いは同じようですね。(2014年9月、北京の路地裏[胡同]で) **撮影:木村武司**

‘わんりぃ’2017年5月号の目次は24ページにあります

「寺子屋・四字成語」雑感-2

胸 有 成 竹

― 中国で見つけた “有名小学校入学準備の為の”絵本から ―

文と訳・有為楠（ういくす） 君代

２回目は、「胸有成竹」という言葉です。これも余り聞きなれませんね。

「昔、文同と言う名の画家がいました。竹の絵を描くのがとても上手かったので、毎日多くの人が彼の家を訪れて、彼に竹の絵を描いて欲しいと頼むのでした。もともと文同は、家の庭に多くの竹を植えていて、いつも竹が成長する様子を観察し、竹の枝が伸びる様子や葉の色の違いを細かく描き分けていました。文同は、何か新しい感覚を掴むと、急いでアトリエに帰って、突然沸き上がったインスピレーションを基に絵を描き上げるのでした。それで、竹の絵は益々上手になりました。

一人の青年が竹の絵の書き方を習いたくて、文同の絵について研究している晃補と言う人に教えを請いました。晃補は、『文同が竹の絵をうまく描けるのは、彼の心の中に竹の様子がしっかりと詰まっているからなんだよ！』と言うのでした。」

意味の説明としては、「もとは、竹の絵を描くには、心の中に竹のイメージをしっかり持たなければならないという意味だが、転じて、何事もうまくやるには、事前にしっかり計画を立てて当たらなければならないという意味となる。」

例文としては、「彼は今回初めて舞台に上がったが、まるで胸中に竹が育っているように（しっかり練習して、自信をもって立派に）演じた。」と出ています。

４，５歳の子供にこんな話をして分かるのか、と毎度思ってしまいますが、きっと「昔、竹の絵のうまい絵描きさんがいて、お家の庭に竹をいっぱい植えて、毎日観察していたので、益々上手になったんだって。皆も良く見て描くと上手に描けるようになるよ。」という程度で、先に進むのかもしれませんね。毎回のお話が少しずつ残って、子供たちの心の中で何かが芽生えることを期待するのでしょうか。

日本語では、「胸に成竹あり」と言い、すでに成算があるとか、あらかじめきちんと考えてあるとかいう意味で使われるそうですが、私は寡聞にして、実際に使われているのを見聞きしたことがありません。辞書の説明によると、実行すべき計画を細部まで詳細に検討し、成功間違いなしという状態まで練り上げることだそうです。

あらかじめきちんと考えてある、とか準備が出来ているとかいう意味では、「用意周到」という言葉を使いたくなりますが、これは中国の四字成語ではないようです。確かに「用意」という中国語は、「意図」とか「心積り」という意味ですから、日本語で言う「用意周到＝あらかじめきちんと準備する」の意味にはなりませんね。これは日本で出来た言葉のようです。

私は日頃、余り気にせずに「四字熟語」を使っていましたが、「四字成語」と「四字熟語」は完全に一致している訳ではないようです。「四字成語」は中国発祥の言葉で、どんな本に書いてあるとか、誰がどんな時に言った言葉であるとか、昔こんな事があって人々がこう言い慣わすようになったとか、必ずお話があって、それを聞くと言葉の意味がよく分かるようになっています。それに対して、日本で出来た言葉は背後にお話こそありませんけれど、並んだ四文字を見ただけで、意味がすぐ理解できます。ちょっと拾ってみただけでも、「当意即妙」、「神出鬼没」、「天変地異」など、意味はすぐに分かります。改めて、日本人の造語力にも脱帽です。

図書館などでざっと調べてみますと「四字成語」辞典に「四字熟語」は含まれませんが、「四字熟語」辞典では、「四字成語」に「四字熟語」も含めて解説しているようです。

君子谋道不谋食

Jūn zǐ móu dào bù móu shí

君子は道を謀りて、食を謀らず〈衛霊公第十五〉

桜美林大学名誉教授／孔子学院講師 植田渥雄

孔子は『論語』の中で君子のあり方について、幾度となく語っています。『論語』は君子の心得を説いたものと言っても過言ではないくらいです。この表題の「君子は道を謀りて、食を謀らず」もその一つです。

「道を謀る」とは、道義心を追い求めることです。「食を謀らず」とは、生活の糧を追い求めないということです。したがってここの意味は、世の指導者たるもの、道義心を養うことが第一で、自分の生活はニの次にすべきだということになります。

ここで肝心なことは、「道」とは何かということです。

道義、道徳、道理等々、「道」という文字にはいろいろな意味が込められていますが、孔子にとって「道」とは、今日私たちがイメージするような内面的、抽象的な意味合いばかりでは必ずしもありませんでした。孔子の説く「道」とは、現実の政治や社会の在り方と直結するものでした。孔子はまた「道之不行，已知之矣 (Dào zhī bù xíng, yǐ zhī zhī yǐ)」(道の行われざるは、已に之を知れり)〈微子第十八〉とも言っています。社会が乱れ、世の道義が廃れたことを、自分はよく認識している、という意味です。だからこれを正さなければならない。そのためには、指導的な地位にある者が率先して道義を実践し、正しい世の在り方を追求しなければならない。そして、それができる人材を育てることを、晩年の孔子は自らの使命としていました。「朝闻道，夕死可矣 (Zhāo wén dào, xī sǐ kě yǐ)」(朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり)〈里仁第四〉。世に道義が行われるようになるなら、その日のうちに死んでもよい、という言葉もその心境を表わしたものと見ることができます。

さて、表題に続く言葉は次のようになっています。「耕也，馁在其中。学也，禄在其中 (Gēng yě, něi zài qí zhōng。Xué yě, lù zài qí zhōng)」(耕せば、餒その中に在り。学べば、禄その中に在り)。「耕」とは田畑を耕すこと、農業に従事することです。「餒」とは飢えることです。「学」とは学ぶこと。ここでは学問をして支配階級の仲間入りをすることです。「禄」とは食禄、俸給のことです。「其の中に在り」とは、自然にそうなるという意味です。したがって、ここの意味は、農民は、いくら農業に励んでも自然の成り行きとして災害や飢饉から免れることはできない。だから飢えは避けられない。しかし学問をして支配階級の一員になれば、何が起こっても多かれ少なかれ俸給にありつくことができるので、飢えることはない、ということです。

だからと言って孔子は、学問に励んで高い地位につくことを奨励しているわけではありません。文はさらに続きます。「君子忧道，不忧贫 (Jūn zǐ yōu dào,bù yōu pín)」(君子は道を憂えて、貧を憂えず)。だから世の指導者は、自分の行為が道義にかなっているかどうかを常に心がけるのであって、自分が貧乏であるかどうかは気にしないものである、と。

飢えに苦しむ農民からの租税によって、指導者は生計を立てることができる。だから指導者は道義を重んじなければならない。そしてその道義は、仲間内だけものではなく、農民にまで及ぶものでなければならない。孔子の目指した「道」とはそういうものでした。

（わんりぃ「中国語で読む漢詩の会」講師）

大連・長春・丹東の旅（その7）

寺西 俊英

8月30日（2016年）となり、7日目の朝を迎えた。昨夜は鳳凰山から戻り一休みした後、夕食を食べに外に出た。タクシーに乗り鴨緑江の川岸で有名なお店を聞くと、「阿里郎（アリラン）」がいいというのでその店に向かった。字の印象から当然朝鮮料理店と思ったが、中に入ると中華料理しかない。丹東は川の向こうが北朝鮮だけあって朝鮮料理が有名なので、折角丹東に来たからにはそれを食べたかったが、山登りしたあとでお腹もすいていたしこの店で食べることになった。まずビールを頼むと、冷たいビールは「鴨緑江ビール」しかないというのでそれを頼む。度数が2.5度なのでアルコールに弱い私でも1本飲めるくらいだ。店は小綺麗であったが料理は口に合わなかった。食後、道路を挟んですぐ鴨緑江が流れていたので川べりを散歩した。有名な断橋のほんの少し川上に架かっている「中朝友誼橋」が紫色やピンク色にライトアップされてとても美しい光景であった。

今日はまずその中朝友誼橋と断橋を見ることにした。丹東市については、「都市めぐり」で紹介したが、2008年7月に行って以来すでに8年の歳月が流れているので改めて書いていきたい。前号で書いたように、約束した時間に登山による筋肉痛とやらで30分遅れてきた友人とタクシーで断橋に向かった。夜景も素晴らしかったが、日中見る二つの鉄橋の構造美は何とも言えない。私は新潟にも住んでいたことがあり、信濃川に架かる鉄橋を思い出す。8月の長岡の花火大会と共に。

右の橋が「断橋」、左は1943年竣工の「中朝友誼橋」

「断橋」の名前の由来は、川の真ん中で橋が途切れているからである。北朝鮮側はコンクリートの橋げたが川面から突き出すように立っているだけだ。この鉄橋は、旧日本軍が日露戦争後、数年経った1909年に軍用鉄道の一部として造り上げた。橋の中央部は大きな船が来ると回転して通過できるようになっており、当時の技術の粋を集めて造られたものだ。しかし1950年に勃発した朝鮮戦争時、米軍機の爆撃でこの回転部分から北朝鮮側はなくなってしまった。その橋が今では多くの観光客を呼び丹東市の観光収入となっている。

断橋を見るのは久しぶりだが、その時と異なり入口に警備員が数人いて手荷物検査の機械を通すことになっていた。今はここは軍事教育拠点らしい。何でこの場所で手荷物検査をする必要があるのか分からない。雇用の確保のためかと思ったが・・・。30元支払って建物の中を抜け断橋の入口に立った。橋には両側に歩道がある。勿論鉄製である。鉄橋には中国の国旗がいくつも取り付けられておりパタパタと音を立てている。真ん中あたりまで歩くと爆撃の後をそのまま残した場所に着く。鉄骨が二重、三重にねじ曲がっていて生々しい。一角に「断橋遺址」および中国語で書かれた説明版が設置されている。それには橋の歴史についてだけで旧日本軍が建設したとか設計者の名前などは全く触れていない。その点旅順の近くの旧日本軍が建設した巨大なダムはその旨も書かれて

「虎山長城」に入場したところに巨大なモニュメント

「一歩跨」石碑

いた。このダムのおかげで旅順地区はもちろん大連市の民生や産業に大きく貢献している。前述したが断橋の百メートル上流には新たに鉄橋が架けられている。この鉄橋は、中国と北朝鮮との貿易、というより北朝鮮への援助物資を送り込むためにあるように見える。

断橋を見終わり、川岸を散策するとあちこちに沢山のチマチョゴリを置いた写真屋がある。断橋などをバックに写真を撮ってハガキ大にしてラミネート加工したものを１枚10元で売っていた。

さて、もう一つの有名な観光名所である虎山長城に向かった。市内中心部から約20km近く離れたところにあり、タクシーでは40元くらいである。虎山長城に着き60元の入場券を買い、入口からの観光用専用車もすすめられ10元支払う。城門までそれほど距離があった記憶はないが、８年前と違うのかなと思いつつ車に乗り込んだ。車はわずか１分余りで城門に着いたが、これで10元取るとはイカサマである。前回と変わった点はもう一つある。入場したところに巨大なモニュメントが造られていたことだ。その下部に次の文字が大きく書かれていた。それは、「万里長城東端起点―虎山長城」とあり、意味は読んで字の如くである。

城門を入ると、幅３メートル程度の城壁の上に造ってある道を上がっていく。北京の長城と造りは同じであるが、使用されているレンガは比較的新しく歴史を感じさせるものではない。しかし発掘調査で何らかの遺跡が見つかってその上に城壁を造り上げたのであろう。入場券などには歴史的経緯は何も触れていない。入口からすこし入ると北東方面に鴨緑江の中州が見え始める。この辺りの中州はすべて北朝鮮に属している。何十軒もの平屋の民家が見える。うら寂れた感じである。そのうち急な石段が続いたあと長城の一番高いところに出た。高いと言っても100数十メートルしかない。しかし周りには高い山がないので見晴らしは極めてよい。この地点からは山の反対側に降りるが、急な石段がかなり続き手すりを持ちながら一歩一歩下っていく。50 ～ 60段下がったところに立札があり、左に行くと「一歩跨」とあるのでそちらに進むことにした。「一歩跨（中国語でイーブークゥという）」とは、そこに中州まで幅10メートルくらいの分流が流れており、一歩で跨いでいけるほど北朝鮮に近いということで名所の一つとなっている。

「一歩跨」への道は上り下りの連続でおまけに太い木の根っこが行く手を邪魔するように伸びており、少々難儀である。その傍らを若い男性二人が追い越していった。少し行くと急な斜面のところに先ほどの男性達が立っている。どうやら年寄りの私を放って置けないと思ったらしく、手を取って引っ張り上げてくれたり大丈夫かと中国語で声をかけてくれる。吊り橋まで来て二人と話をした。

何でもマレーシアから夏休みを利用して旅行中であるとのこと。マレーシア人は‘わんりぃ’と縁のあるジェイソンさんしか知らないが、この二人の男性もジェイソンさん同様とてもやさしい。マレーシアに対する印象が更によくなった。

ようやく「一歩跨」と彫った石碑の前に着いた。すぐ眼前に鉄条網を張り巡らせた北朝鮮の中洲が見える。8年前と同じ光景になぜか安心する。石碑の近くで地元のおばさんが桃を売っていたのでそれにかぶりつきながら出口に向かった。タクシーに乗り込み、12時をまわっていたので運転手に韓国料理の美味しい店を聞くと、「長白山」がいいと言うのでそこに向かった。有名な店だそうでテレビに紹介されたとか。入口の看板にもそのように書いてあった。ビビンバやキムチの味はとてもよかった。食後ホテルで荷物を受け取り、駅まで歩いた。切符売り場に行くと16時28分の動車が取れたので時間まで待合室でゆったり過ごした。動車の大連北駅到着予定時間は、18時47分であったが、例によって3分早く18時44分に到着した。あっという間の丹東旅行であった。

翌31日は、孫へのお土産を買いに行ったり、市内の労働公園からすこしのところにある「松山寺」にお参りに行ったりしてゆったりと過ごした。大連もすぐ9月であるが流石に朝晩ひんやりしてきて街行く人も長袖の人ばかりとなった。　（続く）

■掲載写真はいずれも Google Panoramio より

中国の笑い話 32（「365夜笑話」より）　翻訳：有為楠君代

第103話：誇張

チャーリーがママに話した。

「さっきね、カバみたいに大きなネズミを見たよ。ほんとに怖かった!」

それを聞いたママは怒って言った。

「ねえ! チャーリー、ママは、話を大げさにしてはいけないって十万八千回も言ったでしょ! どうして、ママの言うことが聞けないの!」

第104話：黒板の辺り

地理の時間、先生は黒板の上に掛けた中国の地図を指しながら言った。

先生「楊生! 黄海の西の方は、何地方（どこ）か答えなさい」

楊生は立ち上がって、すぐに答えた。

楊生「はい、それは黒板の辺りです」

第105話：ネズミの変化

小さな子どもが、ハツカネズミをいじって遊んでいた。ある日、籠に穴が空いて、ハツカネズミは逃げてしまった。あちこち探したけれど、ハツカネズミはどこにもいなくて悲しがっていた。

何日か過ぎて、子どものお兄さんが子ウサギを一羽捕まえて来た。

子ども「あ、お兄ちゃん、このハツカネズミ、僕はずっと探していたんだ。でも見つからなかったの。どこで捕まえたの? あれ! どうしてハツカネズミのしっぽが短くなったの? あれ? 耳も大きくなったんだねぇ?」

第106話：馬は人を食べるのか

子どもが父親に訊いた。

子ども「製粉所のロバや牛は、どうして黒い眼鏡をかけているの?」

父親「あれは黒メガネではなくて、竹を編んで黒く塗った目隠しをしているんだよ。石臼の上には米や麦がのっているだろ? 食べてしまうといけないから、目隠しをしてるんだ」

子ども「じゃぁ、馬は人を食べるの?」

父親「馬は人に馴れたおとなしい動物だよ。なんで人を食べると思うんだね?」

子ども「だって、石臼を引くロバはコメや麦を盗んで食べるから黒い目隠しをするんでしょ? 馬が人を食べないんだったら、なんで馬車を曳く馬は黒い目隠しをするのさ?」

「漢詩の会」たより⑪

漢詩創作のルールを学ぶ ②五言絶句

（2017年4月9日）

報告：花岡風子

前回の五言絶句に続き、今回は七言絶句について取り上げます。

李白の『早发白帝城』（早（つと）に白帝城を発す）の詩から七言絶句の平仄と押韻についてみてみました。この詩は、私が大学時代に暗唱した大好きな一首です。この詩の成立時期と創作動機については諸説があるそうですが、ここでは省略します。

それはそうとして、両岸の猿声というのが、今はもう絶滅した独特の哀しい声で啼く猿の声だったことを初めて知りました。猿の声といえばキャッキャと表現されるように騒がしいイメージですが、中国の漢詩の世界で猿の声と言えば、ヒィーッと尾を引くような哀しい啼き声のイメージなんだそうです。

そして、この詩は、早朝、白帝城を発った三峡下りの小船が長江の急流に乗って猛スピードで、千里彼方の江陵（荊州）目指して突き進む様を表現したもので、そこに作者のはやる気持ちが込められています。

漢詩には極めて珍しい、スピード感溢れる詩だというのも新たな認識でした。

早发白帝城（zǎo fā bái dì chéng）　早（つと）に白帝城（はくていじょう）を発（はっ）す

李白（lǐ bái）

〔起句〕
○ ○ ● ● ● ○ ○
朝辞白帝彩云间（韻）（zhāo cí bái dì cǎi yún jiān）
朝（あした）に白帝を辞す彩雲（さいうん）の間

〔承句〕
○ ● ○ ○ ● ● ○
千里江陵一日还（韻）（qiān lǐ jiāng líng yí rì huán）
千里の江陵（こうりょう）一日にして還る

〔転句〕
● ● ○ ○ ○ ● ●
两岸猿声啼不住（liǎng àn yuán shēng tí bú zhù）
両岸の猿声啼いて住（や）まざるに

〔結句〕
○ ○ ● ● ● ○ ○
轻舟已过万重山（韻）（qīng zhōu yǐ guò wàn chóng shān）
軽舟（けいしゅう）　已（すで）に過ぐ万重（ばんちょう）の山

▲平仄配置

七言絶句の平仄配置は、五言絶句に準じます。ただ一句の字数が二字増えるので、決まりもこれに応じて「二・六対」の一項目が加わるだけです。

○＝平声　●＝仄声

1. 二・四不同、二・六対（二字目と四字目の平仄を逆にし、二字目と六字目は同じにする）

×○×●×○×
または
×●×○×●×

2. 反法（起句と承句とでは、二字目・四字目・六字目の平仄を逆にする。転句と承句でも同様にする）

起句　×○×●×○× または ×●×○×●×
承句　×●×○×●× または ×○×●×○×
結句　×○×●×○× または ×●×○×●×

3. 粘法（承句と転句とでは、二字目・四字目・六字目の平仄を同じにする）

承句　×●×○×●× または ×○×●×○×
転句　×●×○×●× または ×○×●×○×

要するに、詩の前半と後半を境にして折り合わせると平仄の位置がピッタリ重なる。これが反法と粘法です。

×○×●×○×
×●×○×●×
×●×○×●×
×○×●×○×
または
×●×○×●×
×○×●×○×
×○×●×○×
×●×○×●×

4. 忌孤平（平声が仄声に挟まれる形●○●を嫌う。但しこの決まりは許容されることもあるが、七言絶句では四字目の平声が仄声に挟まれると●●○●●となる。これは禁じ手となっている。

5. 避下三連（下の三字に同じ平声または仄声が連なるのを避ける。五言絶句に同じ）

▲押韻の法則

七言絶句の押韻の決まりは次のようになっています。

1. 七言絶句の場合は通常、起句、承句、結句の三か所で押韻する。(正格)
2. 承句、結句の二か所だけで押韻することもある。(変格)
3. 転句の末尾では押韻しない。押韻しない句の末尾では、韻を踏んだ字とは平仄を逆にする。平声で押韻した場合、転句の末尾、および押韻しなかった起句の末尾は、必ず仄声にする。仄声で押韻した場合は、その逆。

原詩では、起句、承句、結句の末尾、三か所で押韻しています。「間」、「还」、「山」、何れも平声刪韻に属しています。したがって転句の末尾「住」は仄声です。

ちなみに、原詩の平仄は次にようになっています。

○○●●●○○
○●○○●●○
●●○○○●●
○○●●●○○

以上、原詩がこれらすべての法則に合っているかどうか、確かめてみてください(平仄の見分け方は前号参照)。

▲起承転結の法則

起承転結は絶句を作るためのルールです。サザエさんの四コマ漫画を想像して下さい。

1. 起句(ナニナニ…?)
2. 承句(フンフン、ソレデ…)
3. 転句(エエッ! ナニ? コレ)
4. 結句(ナルホド、了解)

この詩の真意を説くカギは、やはり転句にあります。この転句では、三峡下りの軽快感におよそ相応しくない悲しげな猿の鳴き声が登場して、オヤッ! と思わせますが、その悲しい響きを吹き飛ばすかのような一句が最後に来て、更にスピード感が増します。典型的な起承転結です。

ところで、そもそも唐代になぜこんな作詩法が確立したのでしょうか。その背景に仏教の伝来があるそうです。

六朝時代の中国の僧たちは、サンスクリット文字で書かれた仏典に触れて、世界に表音文字の存在があることを初めて知り、それが、一つの音節が子音と母音に分かれることの発見に繋がったようです。更に声明(しょうみょう)の楽(読経の一種)が入って来て、韻に対する研究が深まり、近体詩誕生に繋がったと言われているようです。古代インドの言語学のことを声明と呼ぶこともあるそうです。

唐の時代、空海こと弘法大師は唐の都、長安にまで足を延ばし、そこで唐王朝の標準音(漢音)に触れることとなりました。仏教の経典は全て呉音という南方の音で読みますが、空海は漢音で読む声明の樂を持ち帰りました。中国本土では失われた声明の読経法が高野山には残っているとのことです。真言宗でも普通の経典は呉音で読経するのに、声明の樂だけは漢音で独特の抑揚を付けて読むのだそうです。

ところで漢詩を訓読でも現代中国音でもなく、平安時代から現代に伝わる漢音で読み上げてみると、唐代の音が何となく伝わるような気がすると言われますが、どうでしょうか。

今日は難しくて頭がパンクしそうになりながら講義を受けていましたが、最後にメンバーの方がこんな質問を先生にされました。

「一字目はなぜ問題にしないのですか?」それに対して植田先生曰く、「『一三五不問』という言葉があります。一字目、三字目、五字目は不問なんですよ。自由にできる所は自由にしてよろしい。逆に246はアブナイから気を付けろ! です。」国道246にかけた、植田先生のナイスなジョークのお陰で、この規則はスンナリ私の頭に入りました。

知識の宝庫、魅力溢れる先生の存在は言うまでもなく、その引き出しを上手く開けて、思いがけないユーモラスなお話を引き出すことができるとは……。
学びに仲間の存在は欠かせませんね。(実際ここまでは3月の講義で行われました)

さて、今度は杜甫の『春望』を取りあげ、五言律詩を見ていきましょう。この詩は杜甫の数ある作品の中で最も優れた詩とされ、日本人にも大変人気がありますね。五言律詩の平仄配置は五言絶句と同じで、二・四不同と反法、粘法。

押韻の法則は、一つには、各聯の末尾(偶数句の末尾)で押韻する、二つには、押韻しない句の末尾では、韻字とは、平仄を逆にする。というものです。この詩は偶数句が平声侵韻で押韻しています。したがって奇

数句はすべて仄声になっています。

春望　春望（しゅんぼう）
chūn wàng

杜甫
dù fǔ

〔首聯〕

●●○○●
国破山河在
guó pò shān hé zài
国破れて山河在り

○○●●○
城春草木深 韻
chéng chūn cǎo mù shēn
城春にして草木深し

〔頷聯〕

●○○●●
感时花溅泪
gǎn shí huā jiàn lèi
時に感じては花にも涙を濺ぎ

●●●○○
恨别鸟惊心 韻
hèn bié niǎo jīng xīn
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

〔頸聯〕

○●○○●
烽火连三月
fēng huǒ lián sān yuè
烽火　三月に連なり

○○●●○
家书抵万金 韻
jiā shū dǐ wàn jīn
家書　万金に抵たる

〔尾聯〕

●○○●●
白头搔更短
bái tóu sāo gèng duǎn
白頭搔けば更に短く

○●●○○
浑欲不胜簪 韻
hún yù bù shèng zān
渾て簪に勝えざらんと欲す

成程、前半では、２字目と４字目に注目し、首聯と頷聯の間で二つ折りにすると、平仄の白黒がピッタリ合いますね！ 次に後半では、頷聯と尾聯の間で二つ折りにしても、ピッタリ合います。更にこの詩の前半と後半、即ち４句目と５句目の間で二つ折りにしても、見事に白黒が一致するのです。これが粘法・反法です。誰が考えたか分かりませんが、古代中国文人の芸術へのこだわりを感じます。

さて、今回もこの詩の歴史背景について詳しくお話がありました。この詩は杜甫が安禄山の乱の最中、都長安城内に軟禁され、かつて栄華を極めた都の廃墟に立ち、絶望と憂国の情を詠んだものです。今回、このことが改めて一字一字から伝わってきました。意味は割愛しますが、最後の一句「渾て簪に勝えざらんと欲す」に関して……。簪は今でいう「かんざし」ではなく、冠を止めるピンのことでした。冠は官位の象徴です。当時、杜甫は曲がりなりにも官位を与えられており、いずれは国家人民の為に役立ちたいという夢を抱いていました。そういうことから、冠が留められないほど髪の毛がすり減った、というのは「その夢が果たせない」という意味でもありました。

当時はまだ40代の杜甫でしたが、すでに髪が薄くなっていたようです。「李白は苦労すると白髪が三千丈になるけど、杜甫は冠が留められないほど短くなるんだね、ここでも両詩人の対照的な性格が表れているね」という植田先生の楽しいコメントで今月の報告を終わりたいと思います。

【‘わんりぃ’の原稿を募集しています】

‘わんりぃ’は、２月と８月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又‘わんりぃ’の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりぃ’に掲載の記事などについても、簡単なご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル‘わんりぃ’

‘わんりぃ’は、毎年４月から新年度になります。ご継続をよろしくお願いします。尚、新年度の会費の納入を４月一杯にお願いします。また、新入会を歓迎します。

年会費：1500円　入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011　‘わんりぃ’

‘わんりぃ’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流によって国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

①年10回(2月･8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりぃ’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100（事務局）

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりぃ’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」

第十三回　さまよえる理想主義者・由比忠之進

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』
大類 善啓（おおるい よしひろ）

➢ 焼け跡闇市時代に帰国

日本敗戦時の由比忠之進の心模様を、友人のエスペランチストである伊東三郎（『エスペラントの父ザメンホフ』岩波新書／著者）はこう書いています。

「惨憺たる敗戦に自信も生活も粉砕された。数か月は幽霊のような放心虚脱のうちに過ぎた。戦争が何であったか、やっと判ってきた。残酷に他を殺害し、自らも滅亡する罪悪であることを知った」。

中国の要請もありましたが由比は、日本が犯した中国への罪を償うため、また中国の新しい国づくりに貢献したいという思いで、自ら進んで技術者として中国に残りました。

由比はひとり中国に残りましたが家族たちは1947年2月、日本に引き揚げました。由比の娘・正子は、「父は余りにも身勝手すぎる」と怒ったようですが、家族は当初、由比家のある福岡県前原に身を寄せ、生活するようになりました。

由比自身は1949年9月、日本の舞鶴に引き揚げてきました。20日ほど入院した後、当時横浜にいた妻や長男らが待つ家に帰ってきました。

東京や大阪などの大都会は焼け野原、まさに焼け跡闇市時代です。しかし日本エスペラント学会の当時の事務所は東京の文京区本郷元町にあり、戦火を免れて残っていました。事務所の南は神田川沿いの外堀通り、北には水道局の給水所があったので、その一角だけが焼け残ったのです。

敗戦後の日本では、何人かのエスペランチストが長谷川テルの消息を気にしていました。そのひとり三宅史平は、敗戦翌日の8月16日にはエスペラント運動を再開すべく活動を開始し、中国東北部（満洲）、台湾、朝鮮など海外を除く日本にいる会員646人に、「今後の運動方針」を問うアンケート調査を実施しました。しかしそのうち、100通ほどの手紙が宛先不明で返ってきました。

➢ 由比、エスペラント学会を訪ねる

1949年11月9日、その日本エスペラント学会に由比は三宅史平を訪ねました。

エスペラント小辞典などの著作もある日本有数のエスペランチスト・三宅はずっと気にかかっていたテルの死を聞きましたが初めは、由比の話を疑問に思ったようです。しかし由比の話を聞くうちにそれは確信に変わりました。三宅はこう書いています。

「長谷川照子という、その人の本名さえ知らない由比の話も、よく問いただしてみれば、疑いようもないことであった。ソヴィエトか中国かの同志に出あいはしないかと、いつも緑星章をつけ、また、接する人ごとにエスペラントのことをたずねたが、たった一人中国人のエスペランチストに出あった。『この人が緑川女史の義弟であった』と由比さんは話されたが、緑川とは、長谷川照子さんの匿名であり、その人の夫は、たしかに劉姓の人で、東北の人であったから、人ちがいではない」。

➢ 由比、一燈園に入る

由比の人生は戦後も波乱に満ちたものでした。理想主義者であった由比は敗戦後の日本で新たな模索を続けていたのでしょう。ザメンホフの「我々は人類の一員である」という人類人主義、いわゆるHomaranismo（ホマラニスモ）に共感していた由比はさまよい続けていたのでしょう。

そして由比は突然、家族の前から姿を消したのです。帰国した翌年の1950年のことです。長女の正枝は、「どこへ行ったか分からず、家族は心当たりの場所をみんなで手分けして探したが、まったく居場所が分からなかった」のです。

今で言う蒸発です。由比は若い時から理想主義者として生きてきました。家族の眼には「父は余りにも身勝手だった」と映ったとしてもやむを得ないかもしれません。

由比はどこに行っていたのでしょうか。実は京都にある「一燈園」に入っていたのです。

一燈園は1904年（明治37年）、思想家、宗教家ともいえる西田天香が京都市山科区に創設した修練道場です。天香が唱える「懺悔の心」を持って、無所有の共同生活をして奉仕・托鉢を行う精神修練の集団です。一燈園の人々は街に出て、見知らぬ家を訪ね、その家の便所を掃除するということで知られ、今でも存在し多方面で活動しています。

戯曲『出家とその弟子』で知られる劇作家の倉田百三や俳人・尾崎放哉なども一時、一燈園にいたことがありました。一燈園の“人は自然にかなった生活をすれば、何物を所有しなくとも、また働きを金に換えなくとも許されて生かされる”という考えは一部の人々を引きつけました。

由比は一燈園で、午前４時から１時間ほど仲間と一緒に荷車を引いて京都の街に出ます。そして料理屋の残飯を集めます。豚の餌にするためです。また前述したように、よその家に行って便所掃除などをしたりして、お布施で生活をしていました。

➢名古屋でのエスペラント活動

しかし東京高等工業時代の友人が由比を探し出し、説得して一燈園を辞めさせ、名古屋の八千代電設に入社しました。結果的に由比の一燈園での生活は一年ほどでした。

名古屋は戦前、由比がエスペラント活動をしていた地であり、エスペラント関係の友人知人も多かったところです。離ればなれになっていた家族、妻と三男の亨の３人で由比は名古屋で生活をするようになりました。その後、友人の紹介で名古屋中央放送局に勤めました。由比の仕事は視聴者から持ち込まれる壊れたラジオを修繕することでした。由比は、当時の日本では最先端の電気の技術と知識を持っており、大変評判が良かったようです。

真面目にサラリーマン生活を続けながら、仕事を終えるとエスペラントの講習会や会合に出かけていました。名古屋は戦前からエスペラント活動が盛んな土地でした。反骨のジャーナリストとして知られる桐生悠々は、『新愛知新聞』の主筆として健筆を振るい、エスペラント運動の強力な支持者の一人でした。また『名古屋新聞』の主幹、柴田義勝は東京での記者時代、神田のエスペラント社で由比と共にエスペラントを学んだ仲間でした。

➢朝鮮戦争勃発

1950年６月、朝鮮戦争が始まりました。アメリカのトルーマン大統領は、韓国軍を援助するために海空軍に出撃命令を下しましたが、最終的に翌年の７月休戦会談が行われ、朝鮮半島は南北に分断され冷戦構造が残りました。ベトナム戦争もまさに冷戦構造の産物でした。

このような状況のなか、1953年９月４日、オーストリアで「平和を守るエスペランチストの国際集会」が開催されました。三日間の会議の結果、生まれたのがMEM（メム）、「世界平和エスペラント運動」です。

MEMの宣言文はこう記しています。

「人間殺戮の新たな危険はいつも目前にあります。このゆえに平和運動の勢力は常に、戦争計画者の動きを見守らなければなりません。平和を愛するすべての者が、人民が、組織され、平和を守るために立ち上がった時にだけ、戦争計画者の新たな戦争をくい止めることができます。戦争と平和に関しては、どんな『中立性』もありません。私たちのもっとも重要で直面する任務は平和を守ることです。平和を守ろうとするエスペランチストのグループや個人を結集して、国際補助語エスペラントを、この運動に役立てながらも、独自に組織された勢力として、平和運動のなかで活動しなければ、という考えが生まれてきました」。

世界のエスペランチストが連帯して世界平和に貢献しようと宣言したのです。

東西文明の比較(14)

陽光新聞社・顧問　塩澤宏宣

前回、登呂遺跡について触れました。そのくだりを復習してみます。

「この遺跡は、住居址、水田址、森林址の三つの部分からなり、12戸の竪穴住居址と2戸の高床式倉庫址があり、水田は、総面積は約7万平方メートル。住民は60人ぐらいです」。

このような集団を“ムラ”とか“ムレ”と呼びます。そして“ムラ”がいくつか集まって出来た集団を“クニ”といいます。考古学や歴史学では、“クニ”というのは政治的地域集団をいい、後生の国家としての“国”と区別するため、学術論文ではあえて“クニ”とするそうです。

蛇足ながら付け加えますが、漢字の「國」は、四方を壁で囲む(囗)＋或(場所の意)。中国を訪れて城壁に囲まれた都市などを見て、改めて「國」の由来を知り、感心したものです。“クニ”を私なりにイメージすると昔の「村」か「集落」のようなものではないかと･･･。

楽浪海中に“倭人有り”

弥生時代、中国では、日本のことを「倭」と呼んでいました。正史「漢書」の地理志によれば、「楽浪海中ニ倭人有リ、分カレテ百余国ヲ為ス。歳時ヲ以テ来タリ献見ストイウ」とあります。

倭が百余国に分れ、その全部か、そのうちのいくつかの“クニ”が楽浪郡の役所に通貢したことを示しています。おそらく紀元前2～1世紀の史実と思われます。では、日本がなぜ「倭」になったのでしょうか。諸説あるようですが、もっともらしい説を述べてみます。

一つは、初めて楽浪郡におもむいた倭人をみた役人が、そのおとなしくて従順なその態度を見て「倭」と名付けた、というものです。もう一つは、当時の倭人は背が低かった(平均身長は150センチぐらい)ので「矮」とし、後に「倭」に直した、という説です。

「後漢書」東夷伝より

「建武中元二年、倭ノ奴国、貢ヲ奉ジテ朝賀ス。使人自ラ大夫ト称ス。倭国ノ極南界ナリ。光武賜ウニ印綬ヲ以テス」という文章と、もう一カ所、「安帝ノ永初元年、倭ノ国王帥升等、生口百六十人ヲ献辞ジ、請見ヲ願ウ」があります。

奴国は、後世「那の津」とか「儺(な)の県(あがた)」と呼ばれた地域、すなわち現在の博多周辺を指します。また「倭国ノ極南界ナリ」の意味するところについては、「倭には南朝鮮の国々を含んでいる」という説(井上秀雄氏)があります。

建武中元二年は、西暦57年です。この時、光武帝は奴国の王に印綬を贈っています。そしてその印が江戸時代の天明四年(1784)、博多湾口の志賀島から掘り出されたことは有名です。

「漢委奴国」と刻まれた金印です。「倭」が「委」になっていたので疑問視されましたが、この金印は「本物」です。

「魏志倭人伝」より

「魏志倭人伝」は正確には、「三国志」のうち、「魏志」の「東夷伝」のなかの倭人条といいます。

「倭人ハ帯方ノ東南ノ大海ノ中ニアリ、山島ニ依リ国邑ヲ為ス。旧ハ百余国、漢ノ時ニ朝見スル者有リ、今使訳通ズル所ハ三十四。･･･」ではじまる「魏志倭人伝は、文字数約2000字ほどです。そこに、邪馬台国と卑弥呼のことが書かれています。

「邪馬台国」はどこにあったのか？「畿内か北九州か」。歴史の好きな日本人の間で、古来、論争になっています。本文では、この論争は脇に置きます。

その理由は、証拠としての「三国志」の原本(3

世紀）が無く、最古の版本でも12世紀のものです。原本から12世紀の空白部分における邪馬台国の記述がある史書には「邪馬臺国」とか「邪馬壹国」などとあります。長い間に写本を重ねるうちに「臺（たい）」が「壹（いち）」にかわったと考えられます。いずれにしても、証拠である「原本」が無い以上、結論はありません。

なお、「魏志倭人伝」には大人（だいじん）・下戸（げこ）・奴婢（ぬひ）の三階級が示されています。大人は支配層の人々、下戸は下層民、奴婢は隷属民をいいます。内乱で生け捕りされた捕虜が「生口」であり、奴婢の原点ではないでしょうか。

「魏志倭人伝」と同時期に編纂された「梁書（りょうしょ）」に「漢ノ霊帝ノ光和中、倭国乱レ相攻メ伐チテ、年ヲ経タリ」とあります。光和中とは中国の光和元年（178）からの6年間を指しています。この時期は「魏志倭人伝」と一致しています。つまり、邪馬台国は、男子が王であったが、「倭国乱レ、相攻伐スルコト暦年」だったため、女子をたてて王としたと書かれています。いよいよ卑弥呼の登場です。

卑弥呼「鬼道ヲ事トシ、能ク衆ヲ惑ワス」

「魏志倭人伝」には、こうあります。

「其ノ国、本亦男子ヲ以テ王ト為シ、住マルコト七八十年、倭国乱レ、相攻伐スルコト暦年。乃チ共ニ一女子ヲ立テテ王ト為シ、名ヅケテ卑弥呼ト曰ウ。鬼道ヲ事トシ、能ク衆ヲ惑ワス。年已ニ長大ナルモ、夫壻（ふせい）ナク、男弟有リテ治国ヲ佐ク。王ト為リシヨリ以来、見ル有ル者少ナシ。婢千人ヲ以テ自侍セシメ、唯男子一人有リテ飲食ヲ給シ、辞ヲ伝エテ出入ス。居処ノ宮室ハ楼観・城柵ヲ厳ニ設ケ、常ニ人有リテ兵ヲ持シテ守衛ス」。卑弥呼は、もっぱら「祭祀」を司り、その弟が「政事」を預かっていたようです。

そのほか、卑弥呼が景初三年（239）六月に、大夫難升米（なそめ）を魏の都洛陽に遣わし、その見返りに、魏の皇帝から「親魏倭王」の称号と金印・紫綬を賜ったことが伝えられています。

この頃の大陸事情

弥生時代といわれていた、紀元前数世紀から後3世紀、西の大陸はどのようなことが行われていたのでしょうか。ひとくくりにすれば、「文明の交流」「シルクロードの序曲」と言えるのではないでしょうか。東西の文化が激しく行き来したダイナミックな時代でした。

中国では秦の始皇帝が中国を統一（前221年）。北方匈奴の侵入を防ぐために「万里の長城」を建設。秦が滅び、劉邦と項羽が争い劉邦が勝利して漢（前漢）を建国（前202年）。前100年頃から漢の威光はめざましく、中央アジア諸国が貢ぎ物を納めた。25年後漢が成立し、明帝がインドに使節を派遣。パルティアの使節が中国を訪問。87年パルティア王国の使節が訪中。166年ローマの商人が来中。そして日本人が大好きな「三国時代」（220年）が始まります。

インド・アジアに目を向けると50年頃に扶南（カンボジア・ベトナム）にヒンズー教徒の王国が誕生。100年、インド使節がローマを訪問し、ハドリアヌス皇帝と面談。150年頃ローマの貨幣がオケオ（ベトナム）、マドラス（インド）へ伝わる。中央アジアへの進出、そしてエジプト・ペルシア・ヨーロッパまで広がる。前139年張騫二度にわたって西域を旅し、交易の基盤を築く。前60年漢が西域都護を設置。前50年頃、絹がローマに伝わる。97年に中国の使節「甘英」がペルシア湾へ。

年表からピックアップしただけで大陸の文化交流が広範囲であったことが分ります。日本列島が、海に囲まれ孤立した状況で、穏やかな弥生時代を築いていたかがわかります。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を 1cm ほどを残して切り取り、おついでの折に田井にお渡し下さい。

東南アジアで避寒する

（2017年2月15日～3月1日　14泊15日の旅）

高橋　節子

二月の町田は寒い。寒さに弱い私は、夫婦仲良く東南アジアに避寒の旅としゃれこんだ。広州経由で東南アジア各都市に行く格安チケットを手に入れることができた。アンコール遺跡群を見て国際バスでラオス南部に行き、また国際バスに乗ってベトナムのフエに抜けハノイから広州経由で帰国するという、ラフな計画を立てて出発した。

着いてみるとカンボジアもラオスも暑いのなんの、最高気温は35度近かった。日中は出歩く気になれず宿やカフェでぐだぐだ過ごした。10時間前後もバスに乗って国境を超える計画は早々にあきらめ、現地でチケットを三回も買い飛行機で移動した。

避寒はできたがそのほかは何しに行ったんだか・・・。

旅が終わって今でも心に残っているのは、風景や名所旧跡、名物ではなく、行った先々で出会った人たちのことだ。

まず、広州。空港で働く人たちが親切この上なかった。簡単に自分のスマホを外国人旅行者の私に貸してくれる。タクシーでホテルに行こうとしたが、近すぎるので乗車拒否。その後、ホテルの迎えの車に乗れるまで、三人もの空港従業員にお世話になった。誰もが最初から気軽に自分のスマホを差し出す。これでホテルと連絡するようにと。

旅の最初に救いの神あり、幸先良し。

アンコールワットに向かう人々

二日目の午前、広州から飛行機で３時間、カンボジアのシュムリアップに着く。アンコール遺跡群観光の基地だ。

５件目に探し当てた安宿で出会ったのが日本人のＳさん。そのゲストハウスの主のごとく昼間は入口の床にべったり座り、端末でネットを見たり、宿のラオス人と話したり、日本人客の相談に乗ったり、のんびりと過ごす。アンコール遺跡群が世界遺産に登録されたのは1992年、クメール・ルージュを倒して新生カンボジア王国ができたのが1993年。Ｓさんはアンコール遺跡群観光ができるようになった頃から、この宿の客になったという。定年退職後は、毎年10月から５月までここで暮らしている。寒いのが嫌だから、と。すでにこの宿の家族同然だ。夕方５時には部屋に戻り、NHK国際放送テレビで７時のニュース（日本との時差２時間）を見るのが日課だそうである。

この生き方、いいね！

ラオス南部パクセの宿では素晴らしい上海人と出会った。

私たちが泊まった宿の経営者は日本人とか。食堂のメニューは全て日本食で、朝食もご飯にみそ汁の定食だった。昼時、そんな食堂の片隅で一人焼肉定食を食べている男性がいたので、日本人かと思い話しかけた。すると、上海から来た旅行者だった。

83歳だと！長身で贅肉一つない。スックと姿勢よく立ち、身のこなしも軽い。黒地のＴシャツに薄い色の細身のパンツ、カーキ色のポシェットタイプのしゃれたバッグを斜め掛けにしている。一人旅だそうだ。ホテルは現地に着くと自分で探し、トクトク（三輪タクシー）や徒歩で観光スポット巡りをする。ラオスは物価が安いから旅行しやすいと言う。翌日はバスで５時間かけて次の目的地へ行くそうだ。元気元気の源は日々の鍛錬にあり。上海では毎日10キロのウォーキングを欠かさないとか。私よ

アンコールワット全景

ルアンパバーン。朝の托鉢

りもずっと年上なのに、体力気力がみなぎっている。若い頃は化学製品を扱う商売をしていた。簡単な英語しかできなくてもこれがあるから大丈夫とスマホを取り出し、辞書機能や地図アプリを使うところを見せてくれた。WE CHAT（中国版LINEのようなもの、私も愛用）を使えば中国にいる家族や知人と簡単に連絡がとれ安心だという。ここまでスマホを使いこなす高齢者もめずらしい。

７年前四川省を旅した時の若いツアーガイドの言葉を思い出した。「中国の老人と日本の老人は定年退職後の生き方が違います。日本人は自分のためにお金を使って外国旅行もする。でも、中国の老人は、自分はどこにも行かずお金を使わないように心掛け、子どもや孫たちのために貯金する」日本の老人を数多くガイドして得た意見だろう。

中国に新しい老人が現れた、と思った。

パクセからルアンパバーンに移動する。昨年、同じ時期にここを訪れたので、勝手がわかる。昨年と同じ屋台で朝食をとっていると、相席になったのが関西から来た二人の大学生。彼女たちの話がよかった。

総勢40名でラオス・ルアンパバーン県の小学校にボランティアとして来ているそうだ。同じことを言っていた青年に昨年出会ったことを話すと、「SIBIO」という学生団体に属して活動していることを教えてくれた。SIBIO はラオスにすでに３校も小学校を作ったという。年に一度ラオスに来て、子ども達に文房具を渡したり、一緒に遊んだり、ゴミ拾いをしたりするそうだ。

ゴミといえば、ラオスはどこもゴミが散乱している。ほとんどがプラスチックのゴミだ。プラスチックが土に還らないことを知らないのだろうか。ラオスは東南アジアの最貧国だが、かつて飢えで困ったことはないという。熱帯気候の自然と調和し、食料を自給自足で調達してきた。自然のゴミは、捨てても土に還る。しかし、経済発展の結果、プラスチック類の品物が大量に出回るようになった。今までと同様の感覚で考え無しにゴミを捨てているのではないだろうか。

彼女たちがゴミ拾いをしていると聞き、私の見方を話した。SIBIOの学生たちは、子ども達と一緒にゴミ拾いをするだけではなく、紙芝居を手作りしてゴミの問題を伝えているそうだ。知識を伝え実践する。彼女たちの地道な活動がきっと実を結ぶに違いない。

ラオスで希望を見た。

シュムリアップで、ルアンパバーンで、一人旅の女子大生とも出会った。１か月、２か月と時間をかけ、東南アジアは言うまでもなくインドにまで足をのばして、じっくりとその土地と人を見て旅していた。屈託なく笑いながら体験談を話してくれた。

心に栄養をたっぷり蓄えて帰国したに違いない。２月の東南アジアでの避寒。出会った人たちの熱をたっぷり吸って帰国した。

あったまりました。

（写真は筆者撮影）

スリランカ紀行⑰

私の中のアンバランゴダ

松林蓉子

アンバランゴダを初めて訪れた折、先ず高い椰子の木と小さな街並が私の視界に入った。スリランカの主要産業は農業である。当地の仮面文化は日本の仮面文化は勿論、スリランカ周辺のアジア諸外国のそれとも共通点がみられる。仮面には農業を営む人々の悪魔を鎮める役割があり、病を防ぐお守りでもある。「痛いの、痛いの、飛んで行け…」の願いが込められているのであろう。今日(こんにち)ではアンバランゴダの仮面は工房から飛び出して独り歩きし、スリランカを代表する民芸みやげとして、多くの観光者から重宝されるようになっている。スリランカの仮面はスリランカ国をあげてのセールスポイントであり、アンバランゴダは魅力的な観光スポットとして多くの人が訪れている。その一方、アンバランゴダは西南海岸の素朴な漁港としてもいまだに機能し続けている。何処となく心にかかる町ではある。

仮面博物館の展示品
（写真は「トリップアドバイザー」から）

仮面工房の片隅で

アンバランゴダの仮面工房でワークショップに参加し、ショールームを見学した。仮面を制作している工房では地道な職人芸を見ることができる。蛇の飾りが付いた羅刹(らせつ)注)、王様、王妃、兵士、獅子、熊、 鰐など数え上げられない程の仮面の種類があった。見学を始めてしばらくすると「説明は一応終了しましたので、あとはご自由に観覧下さい」とのことであった。集中して説明を聴いていたのでぼーとしていたら、日本語を流暢に話される現地ガイドから声をかけられた。父親がスリランカ人の船員、母親が日本人の混血の男性とのことである。日本語が流暢なのはそのためかしら？

「日本に行った父を母が好きになり結婚してこの国に来ました。しかし、どんなに好きあっていても、スリランカは貧しい国なので生活の苦労は言葉では表せないと母は言っていました。一緒に暮らしている内に男と女の感情から兄妹のようになっていくのですね。私も二人の後姿をみて育ちました。ガイドになってからは、ツアーの観光客が去った後、ごみ箱に捨てられたシャツやタオル、靴下まで拾って持ち帰りました。捨てた物を拾っても誰も何も云わないと思ったからです」。

彼の話しはアンバランゴダの想い出として、強烈にして鮮明な印象となっている。日本から来た私に伝えたいものがあったのかもしれない。まだ、ご存命であろうか。現在、国際結婚は花ざかりであ

アンバランゴダの仮面博物館
（写真は「グーグルPanoramioから）

る。考えようでは文化を重ねる暮らしは自分の生き方への挑戦になるであろう。一方人生に厚味を与え豊かなものにしてくれるものだと思う。人種の異なる両親を持つ子供たちは独特の表情をし、またその表情にも魅力がある。私は工房で展示されていた作品以上に彼の印象が強く残った。人々は仮面を被り、苦しみや哀しさ、嘆きを覆い隠してきた。仮面の中で溜息をつき、涙を流してきたのかもしれない。中には、スリランカ解放の思いを托していた人々もいるのであろうか。

『悪魔祓い』への憧れ

タランガッレ・ソーマシリ師が、ゴール、ミリッサ周辺の西南海岸に仮面劇が行われる場所が集中していると教えて下さった。私は太鼓（ドラム）の音色に呪術が入っていようが、奇怪な舞踊（ダンス）であろうが、仮面劇への興味をますます、エスカレートさせていた。

「悪魔祓いの儀礼」の仮面舞踊は大別すると２つに分けられる。祝祭に行われる仮面劇「コーラム」と仮面舞踊「トウィル」である。前者は徹夜で行われる華麗な仮面劇であり、社会風刺などもあって世俗的である。シンハラ人の日常を仮面によって表現している。言葉を代えれば人間の欲望を模しているようだ。

後者の仮面舞踊は、仮面を被って病の症状を表す。コレラなどの伝染病、吐気、盲目、蛇などを演じる舞踊はどことなくピエロの演技に似ている。仮面劇は、かつては豊穣（ほうじょう）を感謝する宗教色を帯びていたが、もっと遡（さかのぼ）れば、悪魔祓いに始まると考えられている。その由来は長くなるので別の機会に譲るとして、医師から見放された病が何故治療出来るのか。現代のミステリーである。劇の中心は仮面舞踊だが、常に「仏陀」の存在が意識されているように思われた。

■注

羅刹：羅刹とは鬼神の総称。ヒンドゥー教に登場する鬼神ラークシャサが仏教に取り入れられたものである。

（ウィキペディアから抜粋）

《‘わんりぃ’掲示板 EXTRA》

チベット人監督の作品が日本の劇場で初上映

「草原の河」（原題「河」、監督：松太加（ソンタルジャ））

https://www.iwanami-hall.com/movie/%E8%8D%89%E5%8E%9F%E3%81%AE%E6%B2%B3

2015年／中国映画／チベット語／98分

標高三千メートルを超えるチベット高原、そこで半農半牧で暮らす一家を描く。日本の劇場でチベット人監督の映画が上映されるのは初めてである。主演の少女、ヤンチェン・ラモ（撮影時６歳）は上海国際映画祭でアジア新人賞・最優秀女優賞を最年少で受賞した。出演者は全て素人とのことだ。

- **上映館：岩波ホール**
  神田神保町2-1 岩波神保町ビル 10F
- **2017年4月29日（土）～6月9日（金）**

第12回「弦之縁」

姜小青フレンドリーコンサート

郷は違えど琴姫たちが 永遠に紡がん箏の糸

姜小青（ジャンシャオチン）（古箏）　馬場信子（琴）　朴順雅（カヤグム）（伽耶琴）

2017年6月23日（金）19：00開演
めぐろパーシモンホール・小ホール
（東京都目黒区八雲 1-1-1）
http://www.persimmon.or.jp/

- **参加費**：4,000円（全席自由）
- **問合＆申込**
  ☎080-1304-7347（村山）
  FAX：045-313-5188
- **主催**：姜小青フレンドリーコンサート実行委員会

古箏、伽耶琴（カヤグム）は、一見、日本の琴に姿が似ているが、日本の伝統楽器・箏は一般的には13弦であるが、中国の古箏の主流は21弦、韓国の伽耶琴の主流は12弦である。また、弦の質も、主としてナイロン製の弦を張る日本の琴に対し、古箏はスチール弦、伽耶琴は絹であるので音質も異なる。

スチール弦を21本張った古箏は４オクターブの音が出せ、身体全体でダイナミックに演奏する古箏はピアノの演奏を聴くように華麗である。一方、伽耶琴の絃は絹で、スチールやナイロンに比して切れやすいためあまりきつく張らず、弦も太めなので音質が優しく重い。似て非なる中国・日本・韓国の箏の、三者三様の違いとそれぞれの良さがある。

久しぶりにアジアの映画を立てつづけて見る

為我井 輝忠

２月から４月にかけてアジアの国々の映画（むしろアジアを舞台にした映画とでも）を何本も見る機会を得た。中国、台湾、パキスタン、アメリカ、日本の５か国の映画である。どれも素晴らしく感動的であったが、一般的にあまり知られていない作品ばかりなので、若干紹介してみたいと思う。興味を持っていただければ幸甚の至りである。

今回見た作品は次の通りである。

1.『スプリング・フィーバー（原題：春風沈酔的晩上）』（中国、2009年制作）
2.『牯嶺街（クーリンチェ）少年殺人事件』（台湾、2007年）
3.『娘よ』（パキスタン映画、2014年）
4.『ヨーヨー・マと旅するシルクロード』（アメリカ、2015年）
5.『ベトナムの風に吹かれて』（日本、2015年）

『スプリング・フィーバー』は何と言っても圧巻であった。中国本土では上映禁止になり、今回のこの日本での上映会のみで（3月13日）、本国ではまだ見ることが出来ない作品だそうである。監督は梅峰（メイ・フォン）で、今回、日本での上映は新百合ヶ丘にある川崎市アートセンター アルテリオ映像館にて、日本映画大学の主催で１回のみの上映であった。監督自身も出席し、上映後対談会が開かれた。

ストーリーは南京を舞台に、夫ワン・ピンの浮気を疑う妻リン・ジュエ、彼女が調査を依頼した探偵、探偵の恋人リー・ジン、そして調査で浮上した夫の浮気相手の青年ジャン・チェンが登場する。男女５人が性別を越えて複雑に絡み合い、狂おしい愛の諸相が展開していく。この作品は、正に中国の同性愛を描いた作品と言ってよいだろう。

『天安門の恋人たち』（2006年）で物議を醸し、当局から５年の活動禁止処分を受けた梅監督が家庭用デジタルカメラでゲリラ的に撮影を敢行した。2009年のカンヌ映画祭コンペティションで初上映されて、脚本賞に輝いた。

『牯嶺街（クーリンチェ）少年殺人事件』は亡きエドワード・ヤン監督が1991年に発表した台湾映画で、上映時間が３時間56分に及び、BBCが1995年に選出した「21世紀に残したい映画100本」に台湾映画として唯一選ばれた作品である。彼は若くして亡くなったが、今年は生誕70年、没後10年と言うことで新たに4Kレストア・デジタルリマスター版で蘇った。正に、私にとっては『非情城市』と共に忘れられない映画である。

物語は1960年代初頭の台北。夜間高校に通う小四（シャオスー）は不良グループ“小公園”に属する少年たちといつもつるんでいた。小四はある日、小明（シャオミン）という少女と知り合い、淡い恋心を抱く。しかし、彼女は小公園のボス、ハニーの女で、ハニーは対立するグループのボスと彼女を奪い合い、相手を殺して姿を消していた。ハニー

▲今回紹介した映画のポスター。左から紹介順

が突然戻ってきたことからグループの対立は激しさを増し、小四たちを巻き込んでいく。最後は悲劇的な結末となるが、詳しくは省きたい。

この映画に小四として主演したチャン・チェン（張震）とプロデューサーのユ・ウェイエン（余為彦）が舞台挨拶された。チャン・チュンはこの作品でデビューをし、それから28年を経て今やアジアを代表する大スターとなっている。

『スプリング・フィーバー』監督の梅峰氏。2017年3月、新百合ヶ丘「アルテリオ映像館」にて。（筆者撮影）

『娘よ』は女流監督アフィア・ナザニエルが2014年に制作した作品で、私にとっては初めて見たパキスタン映画である。岩波ホールでの上映は4月28日までであるが、「シネマ ジャック&ベティ」（横浜市）（5月20日/土～）で上映の他、アルテリオ映像館（新百合ヶ丘北口5分）でも上映検討中とのことである。興味のある方はご覧になってみては如何でしょう。

パキスタンとインド、中国の国境にそびえたつカラコルム山脈の麓には多くの部族がひしめき合っている。そのうちの一つの部族に属する、若く美しい母の生き甲斐は、10歳になる娘のザイナブと過ごす時間だった。しかし、部族間のトラブル解決のために、サイナブと相手部族の60歳にもなる長老との結婚が決められてしまう。母親が一番恐れていたことが現実となった。これで娘の人生は終わってしまう。自分が15歳の時に経験したように・・・決して抗うことが出来ない鉄の掟。掟に背く者には死があるのみである。しかし、意を決した母親は結婚式当日、娘を連れて部族を離脱した。一方、体面と誇りを傷つけられた両部族は協力して2人を追跡し始める。彼らは無事に逃げることが出来たか。

見終えて、この国の今も変わらぬ現実とそれを敢えて映画に取り上げた監督の女性ならではの視点に感銘を受けた。ナサニエル監督はこれがデビュー作で、今後の活躍を期待したい。

『ヨーヨー・マと旅するシルクロード』は、世界的に著名なチェロ奏者のヨーヨー・マが50名にも及ぶ音楽家を引き連れてシルクロードを旅し、各地で演奏会を敢行した記録である。

ヨーヨー・マが2000年に「音の文化遺産」を世界に発信するために立ち上げた“シルクロード・アンサンブル”は国際的音楽集団であった。スペイン、ローマ、トルコ、イラン、シリア、ウズベキスタン、トルファン、西安等々、シルクロードにゆかりのある様々な音楽家たちと共に彼は地図上の国境をなくした音楽を演奏し続けて行くというのがストーリーである。監督はモーガン・ネヴィルで、彼は多くのミュージシャンのドキメンタリーを制作してきたことで知られている。

『ベトナムの風に引かれて』は正に楽しく、おもしろく見ることが出来た映画である。

監督は『津軽百年食堂』の大森一樹（私には初めて名前を知る監督であるが）である。松坂慶子が演じる女性はベトナムのハノイで日本語教師をし、現地の人々との交流や認知症になりかけた母親を現地で世話をしながらたくましく生きていくという物語である。

この映画は劇場一般公開で見たのではなく、私が住む町田の自主上映会で見たのであるが、その時に母親役を演じた草村礼子が参加され、上映後に対談をするという時間が設けられた。初めて女優としての彼女の飾らない人柄や彼女の母親が町田にいて病院で働いていたという話を聞いて、大いに興味を覚えた。思うに、彼女は応援したくなるような女優である。

映画は楽しくも、ただ娯楽として存在するものではない。教えられることも学ぶべきこともたくさんある。これからもアジア映画を中心に優れた作品を見てみたいと思う。

「身体に嬉しい山西省の麺・健康雑穀莜麦を味わおう」に参加

2017年4月16日（日）、麻生市民館・料理室　　鈴木真佐世

‘わんりぃ’の会報３月号で岩田温子さんが書かれた「莜麦（ヨウマイ）に惹かれて」を読んで、莜麦に興味を持ち、４月16日の麻生市民館での講習会に参加させていただきました。なお、莜麦とは欧米で古くからオートミールとして食べられてきた燕麦のことで、中国（山西省や内モンゴルなど）では製粉されて料理されています。

まず、講師の何媛媛さんが莜麦の粉をこねて、魚魚（イーイー）と栲栳（カオラオ）栲栳（カオラオ）の２種類の莜麺の成型の仕方をデモンストレーションしてくださったのを見て、５人ずつの各グループで粉をこねました。パンや餃子の生地をこねるときよりも硬めで、どちらかというとそばを打つ時の硬さです。

こね上がった生地を寝かせている間に、何先生が２種類のタレを作ってくださいました。１つ目は、卵とトマトのタレで、中華鍋にサラダ油を入れて、溶き卵を流し込みますが、油がたっぷりで強火なので、卵はふんわりと膨らんでおいしそう。それを少しつぶしたら、小さく切ったトマトを加えてしばらく炒め、塩と水を入れて煮た後、みじん切りの葱と水溶き片栗粉を加えてとろみをつけてから、鶏ガラ顆粒で味を調えました。きれいな色を活かすために醤油は入れないとのこと。レシピには砂糖が書いてあるけれど、北方の人は甘い味を好まないので先生は入れないで仕上げました。

もう１種類は、豚肉タレで、本来は肉を細かく叩き切りにして使うそうだが今日はひき肉を使いました。ここでもたっぷりの油を鍋に入れて熱し、しょうが、葱、にんにくを入れてさっと炒めてから豚肉と椎茸を加えてさらに炒め、肉の色が変わったら、料理酒、醤油、塩で味付けして少し炒めた後、水を入れ、水溶き片栗粉を少しずつ入れてとろみをつけて完成。料理酒については、日本酒は味が薄いので大目に入れますが、中国では紹興酒の他、白酒（バイジュウ）もよく使うそうです。

各調理台に戻って、これから魚魚と栲栳栲栳の成型をみんなでしましたが、作っているうちに手は少し慣れてきたのですが、生地が乾燥してきて、だんだん作りづらくなっていきました。何とか全部成型し終わってほっと一息。

順番に蒸し器で10分くらいずつ蒸しました。

蒸し上がった魚魚をつまみ食いすると、噛み応えがあってそのままでもおいしい。甘党の人はきな粉をかけて食べたらいいのではなどと食べ方の話に花が咲きました。

私たちがこれらをしている間に、男性２人は莜麦に強力粉を混ぜて蕎麦を打っていましたが、出来上がった蕎麦はちゃんとつながっていてすごい！

蒸し上がった魚魚を使った炒め物を何先生が、もう１品のブロッコリーの炒め物は‘わんりぃ’のメンバーが作ってくださって全てが完成！

今日の献立は、２種の莜麺と２種のタレ、魚魚

巧みな麺棒捌きの何講師

魚魚を成型

セイロいっぱに並べられた栲栳栲

真剣な表情で栲栳栳（カオラオラオ）を丸める参加者たち

ランチの準備は間もなく完了

のもやしと菜の花炒め、莜麦そば（編笠茸入り）、桜の塩漬け入りキャベツの即席漬け、豆乳寒天エンドウ豆入りという豪華版でした。莜麦麺は噛み応えがあっておいしく、ついたくさん食べすぎてお腹一杯、大満足の講習会でした。ネットで調べると、現在のところ「燕麦の力」というダイエット食品は高額で売られているのですが、莜麦の粉自体は日本で手に入らないのが残念です。ダイエット、健康にいいのですから、日本でも売り出されるのを楽しみにしています。

ご馳走が並んだテーブル

↑莜麦の蕎麦入りキヌガサ茸のスープ

《'わんりぃ'掲示板》

◇わんりぃの講座 中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!!

▲5月7日（日）町田中央公民館6F 第3・4学習室
▲6月4日（日）町田中央公民館6F 視聴覚室
▲**時間**：10：00～11：30
▲**講師**：植田渥雄先生
（桜美林大学名誉教授、現桜美林大学孔子学院講師）

▲会費：1500円（会場使用料・講師謝礼など）
▲定員：20名（原則として）
＊録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472（寺西）
E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp（有為楠）

◇わんりぃの講座 ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体の力を抜いて、気持よく発声しよう!!

●**時間** 10:00～11:30
●**5月の練習曲**：5月30日（火）「花のまわりで」
江間章子 作詞/大津三郎 作曲
●**6月の練習曲**：6月28日（火）「雨降りお月さん」
野口雨情 作詞/中山晋平 作曲
★動きやすい服装でご参加ください

●**講師**：Emme（エメ）（歌手）
●**会費**：1500円（会場使用料・講師謝礼など）
●**定員**：15名（原則として）
◆**申込み**：☎042-735-7187（鈴木）
E-mail：wanli@jcom.home.ne.jp（わんりぃ）

日中国交正常化45周年記念

天津京劇院日本公演・京劇「楊門女将2017」

戦う女性の愛と悲しみ――
色とりどりの晴れ着から鎧に装いを変え
楊家三代にわたる嫁姑たちは武将となって出陣する。

2017年6月21日(水)～6月29日(木)
http://www.nikkei-events.jp/concert/kyougeki2017.html

●**東京芸術劇場 プレイハウス**
(大阪及び名古屋での公演もあり)

●**チケット：8800円(全席指定)**
●**申　込：京劇公演事務局(楽戯舎内)**
☎03-5281-8066

スコットランドとの交流
第27回 インターナショナルオルガン・フェスティバル2017

http://iofj.net/

スコットランドの民謡「蛍の光の原曲」や
「アニーローリーの変奏曲」など多数

①東京 6月21日(水)19：00開演
東京カテドラル関口教会聖マリア大聖堂
http://cathedral-sekiguchi.jp/
入場料 5000円(全自由席)

②福島 6月22日(木)18：30開演
福島市音楽堂 大ホール
http://www.f-shinkoukousha.or.jp/ongakudou/
入場料 3000円(全自由席)

③横浜 6月25日(日)18：30開演
神奈川県民ホール 小ホール
http://www.kanagawa-kenminhall.com/
入場料 4000円(全自由席)

●チケット申し込み：山田('わんりぃ'会員)
☎044-981-6171　携帯：090-2769-7885

【東京中国文化センターの催し】

窓に咲く花 »»»»» 中国剪紙展　無料

中国の剪紙は1500年以上の歴史があり、中国の民間や生活文化に深く根付いている。
中国各地で全く異なる風格の剪紙芸術が派生している。家庭を美しく見せ、雰囲気を引き立てることから「窓の花」とも呼ばれるが、ダイナミックな構図、生き生きとした造形、豊かな色彩で生活の息吹きが色濃く、テーマも多岐にわたる。今回の展覧会では、中国蔚県の剪紙を中心に、中国その他の地方の剪紙も展示する。

2017年5月10日(水)～5月25日(木)▲土・日祝休み
10:30～17:30(初日は15：00から。但し、15：30より開幕式(要申込)
▲開幕式参加は、www.ccctok.comより申込みます。

●**場所**：東京中国文化センター http://tokyo.cccweb.org/jp/
(東京都港区虎ノ門3－5－137森ビル1F)

【中国剪紙体験プログラム】
2017年5月11日(木) 15:00～16:30　●**会場**：東京中国文化センター

講師：周広　無形文化遺産の継承人、中国民間剪紙研究会会員。国内受賞歴多数。1995年にユネスコから「中国民間工芸美術家」の称号を授与。

●申込:①中国文化センターのイベント案内ページより申し込む。②E-mailまたはFAXにて、件名を「中国剪紙体験プログラム」として、参加者氏名、電話番号、E-mailアドレスを明記して下記へ中国文化センター
E-mail:info@ccctok.com FAX:03-6402-8169

【5月定例会開催日及び6月号おたより発送予定日】　◆ 問合せ：☎042-319-6491(わんりぃ)

●5月の定例会：5月 9日(火)13：30～ 三輪センター・第三会議室
6月の定例会：6月 13日(火)13：30～ 三輪センター・第五会議室　定例会はどなたでも参加できます。
●6月号おたより発送日：5月31日(木)10：30～　場所：三輪センター・第三会議室
※ おたより発送日はお弁当を持参ください。

《‘わんりぃ’掲示板》

‘わんりぃ’中国語勉強会（1992年５月開講25年間の実績あり）

講師：郁唯（いくゆい）先生（天津師範大学卒業）

和気藹々と楽しみながら中国語や中国の文化に親しんできました。程度としては中級クラス。
１０名～ 12名を定員としています。**※入会金不要１か月間４回の体験無料です**

- ●会場：鶴川市民センター・和室（〒195-0062 町田市大蔵町1981-4 駐車場有り）
- ●日時：毎週火曜日（原則として第５週目は休講）19：00 ～ 21：00
- ●会費：5000円（教科書代を除く会場費、講師謝礼、‘わんりぃ’会費を含む）
- ◆問合：三澤 ☎042-735-2717　E-mail:fwjg1705@mb.infoweb.ne.jp

町田中国語勉強会（毎月第1、第2、第４土曜日）　講師：郁唯（いくゆい）先生（天津師範大学卒業）

※どちらのクラスも入会金不要です。見学ご希望の方は気軽にお問い合わせください

午前クラス　10：15 ～ 12：15

- ●会場：町田中央公民館（原則として）
- ●会費：３か月分として13,000円
- ●対象：初心者の方も大歓迎
- ◆問合：☎042-725-3963（森川）
  E-mail：ymorikawan@ybb.ne.jp

午後クラス 14:00 ～ 16:00［中国文芸サークル］

- ●会場：町田市民文学館・ことばらんど
- ●会費：4,000円/月
- ●対象：中国語を少しだけ習った方歓迎
- ◆問合：☎090-1425-0472（寺西）
  E-mail：t_taizan@yahoo.co.jp

岡上中国語研究会新会員募集　講師：劉　冠群 先生（北京出身）

北京出身の中国人先生から直接聞いて話して勉強してみませんか？
中国語初めての方大歓迎。見学も大歓迎！

- ●**会場**：麻生市民館岡上分館（〒215-0027麻生区岡上286-1）
- ●**曜日と時間**：毎週土曜日10:00 ～ 12：00　●**会費**：月謝5,000円
- ◆**問合せ**：☎044-865-3757（久保田）　E-mail: tizm2008@jcom.home.ne.jp（和泉（いずみ））

初心者のための【鶴川水墨画教室】　体験のお誘い

- ●**講師**：満柏（日中水墨協会会長）
- ●**会場**：鶴川市民センター　（195-0062町田市大蔵町1981-4　駐車場有り）
- ●**曜日と時間**：第２又は第４月曜日　14：00 ～ 16：00
- ●**体験参加費**：1000円　（見学無料/手ぶら参加可）
- ◆**問合せ**：☎042-735-6135（野島）

スマートフォンで撮る〈魅力の旅写真〉講座　１日で写真表現と画像処理方法の全てが分かる！

（※講座参加に当ってカメラの機能や設定についての詳細な知識の有無は問いません。）http://peatix.com/event/252057?lang=ja

- ●５月の開催予定日：5月6日、5月13日、5月20日、5月27日　各日の開催時間：10：00 ～ 20：00
- ●６月の開催予定日：6月3日、6月10日、6月17日、6月24日　各日の開催時間：10：00 ～ 20：00

◆**講義**：**芸術写真の原理**（光とカメラとレンズの知識）、10：00 ～ 15：00
（場所、㈱日中観光振興協会・飯田橋研修センター　東京都千代田区飯田橋4-1-1）

★講師：**佐藤成範**　日本中国写真藝術協会会長/（社）日本写真家協会会員
10：00 ～ 15：00講義＝スマホを活かし一眼レフに負けなく撮影するテクニック

★講師：**三好隆盛**　日本中国写真藝術協会会員/豊島区国際アート・カルチャー特命大使

◆**撮影実習**：15：00 ～ 17：00　撮影実習：特別名勝「小石川後楽園」にて（会場から徒歩10分）
◆**作品講評**：**画像処理＆プリントアウト**：17：00 ～ 20：00（写真の持ち帰り可）
◆**参加費**：10,000円（消費税・小石川後楽園入園料込、デジタル一眼レフカメラ無料貸し出し有）
◆**定員**：16名（先着順）　※最低開催人数８名未満、もしくは悪天候の場合は講座を中止することがあります。
◆**申込**：ryuisyo@gmail.com（三好隆盛）　☎03-6667-5918　日本中国観光振興協会（10：00 ～ 18：00）

作ってみよう！味わってみよう！わんりぃ・料理の会の催し

莢豆（さやまめ）ではなく、れっきとしたお豆の モロッコインゲン・アルジェリア風シチュー
フランスパン／失敗なしの美味しいシュークリーム

▲定員：先着15名（申し込み締め切り：5月8日）

何年か前からスーパーの野菜売り場に並ぶようになった大きくて平たい若莢のモロッコインゲン。一般的には、若莢の時に炒めたり茹でたりして頂くことが多いですね。このモロッコインゲンを成熟させて乾燥豆にしたものは、一見うずら豆のようです。大豆程度の加熱で容易に頂けますのでサラダやシチュウなどにとても便利です。使い方いろいろですが、今回はアルジェリアン・シチューとキャベツのサラダに使用してみたいと思います。

●2017年5月11日（木）10：30～14：00　●**場所：麻生市民館・料理室**
川崎市麻生区万福寺1-5-2/小田急線新百合ヶ丘駅北口徒歩3分

●**当日メニュー**：モロッコインゲンのアルジェリア風シチュー／パンを焼いて60年、杣野さんのフランスパン／美味しくて栄養満点のシュークリーム／サラダ／コーヒー

●参加費：1500円（会場費・材料代）　●持物：エプロン　筆記用具、自分用の布巾

◆申込＆問合：☎042-734-5100（わんりぃ）　E-mail:wanli@jcom.home.ne.j

【料理講座予告】麻生市民館・料理室での料理の会を下記予定しています。

◆6月15日（木）ジャカルタ出身のロサリタさんのインドネシア料理

◆7月17日（海の日）詳細決まり次第、‘わんりぃ’HP（「わんりぃ」で検索可）案内板に掲載します。上記☎にお問合せ歓迎します。

町田国際交流センター・協力部会講演会

シリアの今、私たちにできること

～ボランティア団体「シリアンハンド」の活動～

内戦により何十万人の死傷者が出ているシリア。現在のシリアの様子とシリアンハンドの活動をお話ししていただき、遠く離れた日本から私たちに何ができるのか一緒に考えてみたいと思います。

▲シリアハンド：シリア国内のシリア人女性たちへの仕事提供他、多岐にわたる支援活動を行っている。

●町田市民フォーラム4階　第一学習室AB

●2017年6月3日（土）14：00～16：00

●参加費：無料

●定　員：40名（先着順）

◆申　込：

①FAX又はホームページに掲載の申し込みフォームに、名前・参加者数・電話番号・住所を記入して申し込む。Fax:042-722-5330

②町田国際交流センターの窓口で直接申込む。

◆問合せ：E-mail：info@machida-kokusai.jp
☎042-722-4260
町田国際交流センター
（担当：国際協力部会）

国際フェスティバル in 代々木公園

http://www.yoyogipark.info/

●第18回タイフェスティバル2017
5月13日（土）～14日（日）

●第10回ベトナムフェスティバル2017
6月10日（土）～11日（日）

●スリランカフェスティバル 2017
6月24日（土）～25日（日）

■定例会及びおたより印刷発送の日時・会場は22ページです。

‘わんりぃ’223号の主な目次

「寺子屋•四字成語」雑感②胸有成竹 ……2
論語断片（26）君子は道を謀りて、食を謀らず ……3
大連・長春・丹東の旅（その7）……4
中国の笑い話（32）……6
「漢詩の会」報告⑪漢詩創作のルール②七言絶句 …7
混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義（13）…10
東西文明の比較（14）……12
東南アジアで避寒する……14
スリランカ紀行 ⑯私の中のアンバランゴダ ……16
アジアの映画を立て続けに見る……18
中国山西省の健康雑穀•莜麦（ヨウマイ）の会に参加して ……20
わんりぃ掲示板 EXTRA ……17
わんりぃ掲示板……21～24